

カイツブリの繁殖を妨害するミシシippアカミミガメ

藤田修二

658-0032 兵庫県神戸市東灘区向洋町中2-8 六甲アイランドまちづくり協議会

The record for the red eared slider (*Trachemys scripta*) which interfered nest buildings of the little grebes (*Tachybaptus ruficollis*)

By Shuji FUJITA

The town development meeting of the Rokko island, 2-8, Naka, Koyo-cho, Higashinada, Kobe, Hyogo 658-0032, Japan.

30年余りに誕生した神戸市東灘区の人工島、六甲アイランドの南端、海岸近くに「六甲アイランド野鳥園」がある。約4000㎡の人工池、周りの湿地、林地合わせて4ha。元々はコンテナヤードと住宅地などを隔てる立ち入り禁止の緩衝地として設けられたものだが、窓の付いた観察施設も造られ、今では四季を問わず野鳥のサンクチュアリとして住民らに親しまれている。

住民団体の「六甲アイランドまちづくり協議会」が土地所有者の神戸市と協同でここの保守・管理にあたっていて、これまで一帯で、留鳥・漂鳥・冬鳥・夏鳥・旅鳥合わせて70種の野鳥を確認している。水鳥ではカルガモ、カイツブリ、バンがほぼ通年観察され、これらの繁殖も毎年確認されてきた。

池の水中と水辺にはヤゴ、エビ、カニ、カエルのほか、ハゼの仲間など一部魚類も生息し(この池は大雨の時用の排水パイプを通じて海とつながっており、薄い汽水になっている)、動物食の鳥のエサになっている。野鳥園の周囲には柵がめぐらされているが入ろうと思えば簡単に侵入でき、いつのころか、ミシシippアカミミガメ(以後アカミミガメ)が放たれた。後に触れる駆除の前は、少なくとも数匹はいつも見られた。サイズの大小があることから繁殖していることも推認された。

問題はこのアカミミガメである。カイツブリは繁殖時、岸辺近くに丸い浮き巣を作る。完全な浮き巣でなくとも岸辺近くの枯れ枝の上に水草を集めて巣を作る。ここがアカミミガメの格好の甲羅干しの場所になる。せせせと汗を流して完成させた巣がアカミミガメに占拠され、恨めしそうに眺めているカイツブリの姿を撮ったのが図1である。アカミミガメは常時ここで甲羅干しているわけではないが、居心地がいいのかよくやって来るのでカイツブリは産卵の前に巣を放棄せざるを得ない。



図1. カイツブリの巣上で甲羅干しするミシシippアカミミガメとその様子を見つめるカイツブリ



図2. 六甲アイランド野鳥園内で捕獲したミシシippアカミミガメ(2019年5月-6月に捕獲)

もう一つの問題は、現認はしていないがせっかく産んだ卵をアカミミガメが食べてしまっている可能性がある。複数個の産卵と抱卵を確認し、いつ孵化するか期待しつつ見守ったがとうとう孵化せず、卵そのものがいつの間にか巣からなくなっていたことがあった。ひょっとしたら、孵化したヒナも捕食しているかもしれない。カラス、アオサギなど別の捕食者の可能性も否定できないが、

それでもカイツブリは営巣場所を変えたりして、近年毎年1~2回は繁殖してきた。ところが2019年の今年は、秋まで待たけれど、残念なことにヒナの姿を見ることはできなかった。抱卵の姿さえ見ることがなかった。多分ペアと思われる親鳥はずっといるにもかかわらず。

カルガモ、バンは人の目につきにくいところで営巣するためか、ある日突然ヒナが水面に現れて驚くことが多い。ヒナの数はその時によってずいぶん差がある。考えを巡らせると、カルガモ、バンもアカミミガメの被害を受けている可能性も捨てきれない。

2019年5月末から6月初めにかけての4日間、神戸市立六甲アイランド高校の生徒たちと一緒にこの池のアカミミガメの駆除作戦を行った。神戸市の支援や明石・神戸アカミミガメ対策協議会の指導を受けた。初日に神戸市環境局から捕獲網を借りて2日目夕に池の3か所に捕獲網を投入し、翌日夕に網を引き揚げ、雌(体長21cm)、雌(同16cm)、雄(同17cm)の3匹を捕獲した(図2)。その後一部別の場所に網を再投入し、その翌日朝網を引き揚げたが成果はなかった。作戦終了して網を引き揚げた当日、別のアカミミガメ1匹が悠々と甲羅干しをしている姿を見せつけられ、悔しい思いをした。来年リベンジしたい。

全くの蛇足だが、2019年の夏からヌートリアー頭がここに棲みついている。海を渡ってきたのか、そのような能力があるのかわからないが、これも駆除したい。